

# 「高校生のための図書館講座 LibCo(りぶこ)」について

中央図書館

松井 涼真

## 1. はじめに

大阪府立中央図書館(以下「当館」という)は2016年4月より「高校生のための図書館講座 LibCo(りぶこ)」(以下「りぶこ」という)の受付・実施を始めた。このプログラムは図書館や本について学ぶことができる複数の講座内容を用意し、学校側に選んでもらうという方式をとっている。このような試みは当館として初めてのものであった。

ここでは企画発案者として、プログラムを成立させるまでの経緯、内容と実施例、そして今後の課題をまとめる。これから高校生向けの催しなどを考えておられる図書館があれば、この拙文が何らかの参考になれば幸甚である。

## 2. 企画の経緯

立案のきっかけとして最も大きなものは、大阪府の「第3次大阪府子ども読書活動推進計画」であった。2016年3月に策定されたこの計画では、中高生の「読む力をつける」ことが重要視され(第4章 p26~27)<sup>(1)</sup>、具体例として「学校図書館や公立図書館を活用した調べ学習の拡充」が挙げられている。この計画の策定が進められている中、従来の学校への資料貸出だけではなく、中高生向けの新しい施策が必要であるという認識が当館内にあった。若い世代の人に、図書館を使いこなし、知識と情報を活かす力を身につけてほしいという私個人の思いとも一致し、企画に向けて動き出した。

企画以前から、当館は中高生向けの事業をいくつか行っていた。例えば学校から見学依頼があれば随時対応していたが、それは図書館の紹介の側面が強く、調べ方や本について知ることができる直接的なプログラムを提供していない。大阪府内の国公立学校を対象に、特定月の第2木曜日(通常は休館日)に実施している「スクールサービスデー」ならば、そのような内容も含んでいるが、年に5日のみの開催と実施可能日が少ない。当館の中高生向けホームページである「YA! YA! YA! べんりやん図書館」には、本の探し方などを紹介するコンテンツが存在するが、ホームページである以上受動的であるし、やはり図書館や本の実物を目にしながら体験してこそ知識は身に付きやすい。

図書館の使い方、調べ方を、直接体験によって学ぶことができる新たな事業が必要である。そのように考えてプログラムを練り、完成したのが「りぶこ」だった。この名前は「図書館講座」を直訳した「Library Course」を略したものである。

### 3. プログラム内容

このプログラムは大きく分けて「基本コース」と「選択コース」の2種に分かれている。3つの「基本コース」は参加者全員に必ず受けてもらう。一方「選択コース」は4種類の内容の内、好きなものを2つまで選んでもらう。

- ・基本コース1 府立中央図書館の説明

当館の役割、蔵書規模、地下1階から地上4階までの機能、レファレンス等の様々なサービスについてを、パワーポイントの資料を使って説明する。これは通常の団体見学で行っているものとほとんど変わりはないが、まずは図書館について知ってもらうために必須コースとしている。

- ・基本コース2 館内見学

実際に目で見て感じてもらうために必須としており、館内を職員が案内する。短い時間しか取れない場合は地下1階の書庫のみを、長時間確保できるならば地下1階から地上4階まで全て案内する。内容としては、通常の団体見学に手を加え、見学中に紹介する資料を生徒に身近なものにするなどの工夫を行っている。(例として調査研究で使えるような事典を紹介するなど。)実施後の感想では地下書庫に強い印象を抱いている生徒が多い。

- ・基本コース3 WEB-OPACの使い方

資料を探すための方法として、WEB-OPACの使い方を説明する。「キーワード」「分類」「件名」を駆使して、効率よく目的の資料を探し出すためのテクニックを、単にWEB-OPACを検索して見せるだけでなく、実例を中心に、Q&A方式の高校生向けに作成したオリジナルのパワーポイント資料で解説する。

これを一つのコースとしたのは、以前に図書館見学を担当した際、館内を自由に見て回る時間でOPACを使用していた生徒が、キーワードでなく文章で検索しているなど、使い方に慣れていない場面を何度か見たためだ。調べる力を養う場を提供することが命題である「りぶこ」にとって、このコースは必須であった。

- ・選択コース1 インターネット情報の使い方

学校の教員、司書教諭、学校司書の方と話していると「今の生徒はインターネットでばかり調べものをする」とよく聞く。事実、インターネットは有用なツールであり、図書館員も利用している。だが、使い方を誤れば、膨大な情報の中から適切なものを見つけられなかったり、不確かな情報を見抜けなかったりもする。

このコースでは、インターネットを使って調べものをする際に注意する点や、有用なデータベースを説明する。府内市町村図書館の職員向けに、当館が行ってきた講習を高校生用にアレンジしたものであるため、実用的な内容となっている。

#### ・選択コース2 調べかたのコツ

このコースでは図書館資料を使って調べものをする方法を説明する。事典・辞典類やレファレンスブックといった多種多様な参考図書はもちろんのこと、図書と雑誌の情報の違いや、オンラインデータベースの使い方などだ。実際の資料を手にとってもらいながら説明している。こちらも市町村図書館向けの講習をアレンジしたものである。

#### ・選択コース3 本のおはなし

本の歴史や種類について知ることのできるプログラムである。前半は古代のパピルス、竹簡、巻物といった書籍が、現在の本の形になるまでの歴史を、現物(レプリカ)を見ながら学ぶ。後半は障がい者支援室の司書職員が、音声資料やマルチメディアDAISYといった資料を紹介し、紙の本以外にも多くの種類の資料が図書館にあることを学ぶ。本に親しんでもらうため、「りぶこ」用に新しく企画した。

#### ・選択コース4 本棚に本が並ぶまで

外からはなかなか分からないであろう、図書館にどのようにして本が入ってくるかを説明する。当館が収集方針を定めて本を選んでいること、本のカタログではなく現物を見て選書をする「見計らい選書」の仕組み、購入した後に本にラミネートフィルムやラベルを貼る作業など、普通の本が図書館資料になるまでを知ることができる。このコースは、毎年受け入れをしている大学実習生への説明を高校生向けにアレンジしたものである。

以上が当プログラムの内容である。これらのプログラムを1年中、平日の開館日に提供している。平日のみとしたのは、職員がしっかり対応できるのは平日であることと、休校日の開催は難しいと考えたためである。最少催行人数は5人で、教員や学校司書等の付き添いを必須としている。申し込み方法は、配布しているチラシの裏、またはホームページ

上にアップしている申込書による。

次に、5人程度の少人数による実施例と、30人程度の大人数の実施例の2例を記す。

#### 4. 実施例(3～10名)

企画当初から、図書委員や文科系クラブ、または図書館に興味のある有志などの少人数による実施が多いと想定していた。実際にこの実施例も、とある府立高校の図書委員5名が参加した。引率は学校司書で、図書委員の生徒たちに図書館について知ってもらいたいと思い、このプログラムを申し込んだのだという。

この日は平日で、学校は短縮授業により午前中で終わったため、午後1時30分頃に来館。館内の会議用の小部屋(収容人数は最大10人ほど)を使い、プログラムを開始した。内容とスケジュールは以下の通りである。

13:30	13:50	14:10	14:20	15:00	15:50	16:00
府立中央図書館の説明	WEB-OPACの使い方	休憩	調べ方のコツ	館内見学	質疑応答・アンケート記入	終了

少人数のプログラムには以下の特徴がある。

- ① 生徒一人一人の表情・反応を見ながら行うことができる。事前に引率の教員・学校司書から生徒の興味関心を聞いておけば、それに合わせた内容にすることもできる。
- ② 体験型のプログラムにすることができる。「WEB-OPACの使い方」と「調べ方のコツ」では、生徒1人につき1台のノートパソコンを利用してもらい、検索方法や調べ方を体験することができる。また、館内見学時も書架にある資料を手渡し、一人ずつ見てもらうことができる。

アンケートによる生徒の感想では、やはり地下書庫に多くの本が保管されていることに感心する内容が多かった。「WEB-OPACの使い方」や「調べ方のコツ」に直接的な感想はなかったが、選択式の回答では「とてもよかった」「よかった」のみに丸がつけられていた。

#### 5. 実施例(30名前後)

30人程度の大人数での実施は、主にクラス単位・グループ単位での申し込みによって行われる。想定していたのは、調査研究の授業など、いわゆる課外授業の一環としての申し込みだった。この実施例でも課外授業において、美術館や工場など様々な選択肢の一つとして、図書館が選ばれたものであった。人数は30名ほどで、いずれも図書館の見学を希望

した生徒たちである。引率教員は3名、そのうち司書教諭が1名であった。朝9時から午前いっぱいの実施である。スケジュールは以下の通りだった。

9:00	9:30	9:50	10:40	10:50	11:30	12:10	12:30
府立中央図書館の説明	WEB-OPACの使い方	館内見学	休憩	調べ方のコツ	本のおはなし	質疑応答	終了

大人数のプログラムの特徴は4点ある。

- ① 主に講義形式での実施となり、一人一人が調べ方などを体験してもらう内容にすることは難しい。ただ、辞典等の資料を会場内で回し読みする、プログラム後に自由に見る時間を設けるなどの工夫は可能である。
- ② 学校側は1年間のスケジュールの中で、「りぶこ」に参加することをあらかじめ決めていることが多い。図書館側も場所、人員の確保が必要であるため、できる限り早くから調整を行い、準備することが望ましい。
- ③ 同時間に複数のコースを実施することもある。30人の参加で、15人ずつ2つの選択コースを実施した例がある。
- ④ 生徒は、少人数の時と比べるとリラックスしている。

アンケートで書かれている生徒の感想は、少人数のときとあまり変わりはなく、地下書庫に関する感想が多い。ただ、講義形式であるがためか、「WEB-OPACの使い方」「調べ方のコツ」が「よくない」という意見も少ないながらあり、一層の工夫が必要と感じた。

## 6. 課題

現在までの実施数は、1年目に3校、2年目に2校(後述する学校へ出張しての実施が他に1校)であり、まずまずの実施数であると思う。だが、実施していく中で見えてきた課題もあり、今後このプログラムが発展していくためにも、以下にその課題を列記する。

### ① プログラム内容について

現在の各コースのほとんどは、既存の団体見学や講習を高校生用にアレンジすることで、内容を作る負担をできるだけ軽くしている。ただ、それゆえに講義形式の一方通行な内容のものもある。生徒たちとしては普段受けている授業と変わらず、新鮮味がない。今後、実施数が増えていくことで、生徒たちが実際に調査を行うようなワークショップ形式、講師役と生徒が双方向にやり取りをしあうディスカッション形式など、高校生向

けに適切に調整された、「りぶこ」オリジナルの内容を作り出すことも必要である。

## ② 実施場所について

高校の教員に「りぶこ」をPRすると、必ず聞こえてくるのが「府立図書館まで行くことが難しい」という声だ。確かに、遠方にある学校から府立図書館まで、教員が生徒を連れてくるのは難しいかもしれない。

解決方法の一つは、図書館員が学校まで出張して講座を行うことだろう。実際、学校側の希望で、試行的に出張で「りぶこ」を開催した事例もある。恒常的に受付するには、人員上難しいところもあるため、例えば期間の限定(夏休み中のみなど)や回数の限定(先着順で年に数回のみ受付など)を行うことで、実施数を制限しつつ実施することが現実的であるように思う。ただし、図書館を実際に訪れてもらうことは、情報拠点としての公立図書館を知ってもらい、今後の利用につなげることができる側面もある。出張による実施はその効果を減じるという点を忘れてはならない。

もう一つの解決方法は、学校側が生徒を外に連れていきやすい課外授業にターゲットを絞って広報を行うことだが、この説明は④に譲る。

## ③ 対象の拡大

「りぶこ」は高校生のみを対象としたプログラムである。そのようにした理由はいくつかあり、一つは同じ府が設置する府立高校ならば伝手もあり実施しやすく、また府立図書館として学校司書の不在等で図書室の運営が難しい高校を支援するべきと考えたこと。一つは、コース内容によっては図書館職員向けの講座を元にしており、難度を考慮すれば対象は高校生が適切であると考えたこと。そして最後の理由としては、最初から対象を幅広くとって行うよりは、まず限定的に行うことで職員側が経験と実績を積み、後に対象を広げるか検討した方がスムーズであると考えたためである。

対象を広げるべきか否かは、今後の検討課題である。高校生と中学生はよく「YAサービス」とひとくくりにされがちだが、1年違うだけで生徒の様子は異なる。中学生を対象にするならば、プログラム内容もまた変えていく必要がある。

## ④ 広報

「りぶこ」の広報は開始当初から重要視してきた。ホームページの作成、学校へのチラシの配布、庁内ネットワークへのお知らせといった基本的なものはもちろんのこと、普段から交流のある高等学校図書館研究会を通じた告知により現場の司書教諭・学校司書にも告知が行き届くように配慮した。同研究会の参加校から申し込みがあったことは

その成果と言えるだろう。

ただ、全ての学校図書館関係者に行き届いているかという点、まだまだそうとは言えない。広報において大事なものは、校長・教頭といった管理者と、教員・学校司書といった現場の人間、双方へ働きかけること、そして継続的にPRし続けることである。四半期に一度程度は、チラシの配布や庁内ネットワークでのお知らせをすることがベターであると思う。

また、学校側が申し込みしやすい時期にターゲットを絞って広報をすることも大切だろう。組織的に参加しやすい課外授業や、時間の取りやすい短縮授業がいつ行われるかを情報収集することが必要である。

## 7. まとめ

新学習指導要領(中学校は2021年度全面実施、高等学校は2022年度から年次進行で実施)において主体的・対話的で深い学びが重要視されている。公立図書館はそれを「学校で行うこと」とだけ認識してはいけけないのではないか。これまで通り「調べる場所」として受け皿を用意しておくだけでなく、「調べる力を養う場所」として何らかの施策を用意しておくことが必要である。「りぶこ」はそのためのプログラムの1つとして、今後発展していきたい。

また、学生の間は学校が学ぶ場所であるが、卒業し社会人となると途端に学びの機会は少なくなる。「りぶこ」によって、社会の中で学びを提供する場所である図書館について知ってもらい、自ら学ぶ方法を身に付けてもらいたい。そのような社会人を増やすことが、社会の中での図書館の役割が認知されることにもつながるだろう。

---

(1) 「第3次大阪府子ども読書活動推進計画」の策定(平成28年3月)について、  
<http://www.pref.osaka.lg.jp/chikikyoiku/dai3jidokusyokeikaku/index.html>  
(参照 2019-1-17)